

【修士論文要旨】

ひとよぎり
一節切尺八の研究

加 藤 いつみ*

筆者は、『国際人間学フォーラム』第12号（2015）に研究ノートとして「一節切尺八の研究」として投稿し、その後その内容を発展させて修士論文として書き上げた。その内容は、一節切尺八（以下一節切と略記）の起源、一節切について書かれた文献、現存する一節切、一節切の譜面の五線化であり、その目的は、一節切の変遷、当時吹いた人、楽器を作った人、吹かれた曲、人々の生活との関わりを通して、近世邦楽の特徴を掴もうとするものである。その内容は大きく四つに分けることが出来る。以下、順に内容について述べてみよう。

1. 一節切尺八の起源

一節切は、室町から江戸中期まで盛んに吹かれた真竹を素材とする縦笛である。その構造は前面に4つ、背面に1つの指孔があり、一つの節を持っている。現代の尺八（虚無僧尺八）と大きく異なる点は、根元が吹き口になっていることである。一節切の歴史は古く、鎌倉初期の雅楽家・^{こまちかざね} 狛近真（1177-1242）著の雅楽書『教訓抄』（1233）や室町中期の雅楽家・^{むねあき} 豊原統秋（1450-1524）著の『體源鈔』（1512）の中にも“尺八”としてこの笛と思われる記述が見られる。しかし、この笛が一節切かどうかははっきりわからない。その理由は、単に“尺八”とのみ表記されているために、一節切か一世代前の古代（雅楽）尺八か他の笛かを見極めるのが難しい。

一節切と言う名称は、高三隆達（1527-1611）の歌に「尺八の一節切こそ音もよけれ、君と一夜は寝もたらぬ」という言葉が初出であり、また1664年に成立した^{なかむらそうさ} 中村宗三著の^{しちくしょしんしゅう} 『糸竹初心集』の譜本の最初のページに「一節切吹様 上」としてこの名が書かれている。これが我々が「一節切」という文字を確認出来る初期の文献資料である。

*国際人間学研究科言語文化研究 博士前期課程

2. 一節切に関する文献

16世紀初期までの文献には、一節切はほとんど“尺八”と明記されているのでその尺八が一節切を指しているとはっきり断定することは出来ない。しかし筆者はその“尺八”は一節切を指しているのではないかと推測して研究を進めてきた。まず“尺八”という文字でインターネット検索し、多くのデータを収集する作業からはじめた。しかし、単に尺八で検索したため、の中には古代尺八、一節切、虚無僧尺八が含まれていた。これらの文献を追跡することにより、この笛がいつ頃から登場し、一節切と呼ばれるようになり、栄えそして衰退していったのかがある程度明らかになる。収集出来たデータ 32 を「一節切の文献一覧」として表に纏めた。一節切と断定できる文献、一節切が書かれた絵・図について、枠で囲んだ。

1) 一節切の文献一覧

	分類	データ
1	雅楽書	教訓抄(1233)、 體源鈔 (1512)
2	日記	看聞御記 (1425)、 宗長日記 (1522-27)
3	随筆	ささめごと (1463) ひとりごと (1468) ひとりね (1724) 雅游漫録卷五～洞簫辯～ (1786)
4	漢詩・漢文集	狂雲集 (15世紀中頃)、 狂雲詩集 (15世紀中頃) 林羅山文集-餘音尺八記- (1625)
5	和歌	俳風柳多留 (1764) 黄葉和歌集 (1699)
6	歌謡集・謡曲集	「隆達節唱歌」90 16世後半 、 松の葉 (1703) 、 閑吟集 (1518) 、 田植草紙(14-15世紀)、夜討曾我 (1629 能で演じる)
7	仮名草子、浮世草子、読本	西鶴諸国ばなし「不思議のあし音」 (1685) 日本永代蔵「才覚を笠に着る大黒」 (1688) 春色梅児誉美 (1833)、 春色辰巳園 (1833)、 仁勢物語 (1624-44)、「風流志道軒伝」(1763)
8	歴史書	古事談 (1212-15)
9	百科事典	和漢三才図会十八 (1712) 、 嬉遊笑覧 (1830)
10	絵・図によるもの	三十二番職人歌合 (1494)、 七十一番職人歌合 (1500頃) 龍潭寺屏風「遊楽之図」 (17世紀後半) 享保図 桜堂葉師「享保絵馬」 (1718)

今回は、スペースの関係上その内容に全てについて触れることは出来ないが、文献上一節切という言葉が登場したのは、前記したように高三隆達（1527-1611）の「隆達節唱歌」（文禄-慶長の頃 1592-1615）の中での“一節切”である。当時にあっては、尺八といえ一節切の事を指す言葉であったために敢えて一節切と云わなかったのであろう。今回、この研究を通して、笛の変遷のみならず、吹いた人、作った人、吹いた曲、当時の人々の生活との関わり、などの貴重な情報を得る事が出来た。

3. 現存する一節切の調査

筆者は、2008年から一節切を所有している寺院・博物館や個人の愛好家を訪ね楽器の調査を試みた。その結果、39本の笛のデータを収集することが出来た。その特徴を述べてみよう。

- 1) 39本のうち29本に銘が入っていた。龍吟あるいは竜吟という銘を持つ笛が3本あった。銘とは、ただ楽器としての役割以上に愛玩楽器としての意味があったのであろう。
- 2) 笛の長さは、33.3～34.0 厘のサイズの笛が34本有り、全体の約8割にあたる。調査から分かったのは、現存しているのは黄鐘管が多い事である。
- 3) 大森宗勲や原是斎などの名人と言われた人達が製作した笛が現存していることから、彼らは自身で楽器を作り、譜本を書き、そして指導に当たるなど、全てを自身でこなし、17世紀の流行の基礎を築いたことがわかってきた。
- 4) 由緒書きが入っていたり、箱の表蓋に和歌が書き込まれていたり、笛としての機能と美術品としての意を兼ね備えていると思われる。中でも彦根城博物館所蔵の“夕時雨”は見事な笛である。

室町期には「双調」「黄鐘調」「𪛗越調」「平調」「盤渉調」の長さの異なる5つの笛が存在していたが、江戸期においては「黄鐘管」と呼ばれる約33.5cmの笛が多く残っているところから、「黄鐘調」の笛が最も多く吹かれたことが分かってきた。また、17世紀の中頃成立した譜本『糸竹初心集』（1664）や『紙^{いかのぼり}鳶』（1699）の中には、一節切とは、筒音（最低音）が黄鐘（A）と定める楽器を指す、と明記されるところから、黄鐘管が中心になっていたことが分かってきた。

以上のように実際に楽器を調査することにより、江戸期の一節切の実態がある程度明らかになった。

4. 『宗左流尺八手数並唱歌私之目録』について

日本音楽にとって17世紀は、画期的な時期であった。それは、雅楽以外は口伝の世界であった音楽の分野に、文字で書かれた譜本が成立した事である。それまでの我国の芸能は、師匠から口伝で教えられるという流派重視の秘伝の習慣が踏襲されてきたため、後継者が途絶えると、その芸も自然消滅の運命をたどった。しかし、17世紀の譜本が成立したことによって、一節切の

普及は知識階級のみならず大衆の間にも広がっていった。中でも中村宗三著『糸竹初心集』や『紙鳶』の譜本には、“手”（一節切では曲の事を“手”と呼ぶ）のみならず、当時の大衆が歌った“はやり歌”が収められており、一節切の流行を盛り上げた。その中の一冊、17世紀後半に成立した『宗左流尺八手数並唱歌私之目録』を取り上げ、そこに書かれた“手”の五線化を試みた。一節切の楽譜の音高は、フホウエヤリヒの文字譜で示されているが、音長に関する指示は明記されていない。スペースの都合上、一節切の音高を五線譜に対応させてみた。



音と指孔の位置を覚え、スク、ヲドル等の奏法を理解すればある程度吹く事は可能である。しかし、二世紀ほど忘れられていた音楽を再現させていくのは難しい。

本稿では、一節切の歩んだ道を追跡し、残された文献から笛の変遷を辿った。一節切は、300年以上に亘って好まれた楽器であったが、19世紀中頃で衰退してしまった。その理由として考えられるのは、三味線の台頭が近世日本音楽の様相を一変させてしまったことによるものであろう。三味線は、律音階に半音を加えた陰旋法（都節）を生み出すことにより、人形浄瑠璃や歌舞伎の世界に新たな境地を造り出した。この三味線の導入は、観客の臨場感を高め、世俗音楽の流行に拍車をかけた。三味線の誕生と同じ頃出現した虚無僧尺八（以下尺八と略記）は、この半音の技法を上手く取り入れ、流行の波に乗った。三味線と結びついて琴・三味線・尺八で三曲合奏するなど、その後の発展に結び付いたが、一節切は楽器の構造上、流行に対応することは難しく、19世紀中にはほとんど衰退してしまった。しかし、その理論の一部と“手”のいくつかは三節切尺八（以下三節切と略記）や尺八に伝わった。三節切とは、一節切が変化してできた笛であり、竹の節を3つ使うところからそう呼ばれるようになった。根の部分を使うことにより、今日の尺八の元となったのではなかろうかと言われている。三節切では、フホウエヤタヒイの文字譜を使用しており、「よし野の山」「獅子踊」「おかざき」「すががき」「瀧落」「りんぜつ」など一節切で吹いた“手”がそのまま吹かれている。一方、尺八においても琴古流、都山流といった尺八の主流派はロツレチリの文字譜を使っているのに対して、真法流や竹保流は、フホウエヤタヒイの文字譜を使っており、またやゝ旋律は異なっているが「すががき」「瀧落」「りんぜつ」など一節切で吹いていた曲を吹奏している。そして折、ツク、小枕、カスリ出しなどの奏法も一節切から受け継いだ。これら三つの楽器は、それぞれに性能は異なるが、一節切から三節切へ、そして尺八へと互いに影響を受けつつ吹き継がれたのである。しかし、今日にあっては、尺八のみが残り、他の二つの笛はほとんど吹かれることはない。

今回は、『宗左流尺八手数並唱歌私之目録』の譜本の内容から一節切への理解を深め、復活に結び付けることが研究の目的であった。今後、一節切から三節切へ、そして尺八へと流れる軌跡を辿ってゆくという新たな研究は、一節切を深く知る糸口になるのではなかろうかと考える。今

後の課題としたい。

参考文献

- 井出幸男著『中世歌謡の史的研究—室町小唄の次代—』三弥井研究叢書（2005）
上参郷祐康著『糸竹論序説』日本音楽論考自選集 私家版（1995）
上野堅實著『尺八の歴史』出版芸術社 2002
井出幸男著「中世の芸能」その担い手と享受の様相『季刊 CONSORT』（1988）
栗原廣太著『尺八史考』竹友社（1918）